

第1章

「カスパー！ 食事だよ！」

聞きなれた金切り声が、栄光の未来の夢に浸っていたオルメイヤーを驚かして、今の不愉快な現実に引き戻した。声も快いものではない。もう長いあいだ聞き続けてきた声で、年々彼にはそれが厭わしくなっていた。かまうことはない。まもなくこれらすべてに終止符が打たれるのだから、と彼は思った。

彼はそわそわと体を動かしたが、それ以上呼びかけは気にならなかった。ペランダの手すりに両肘をついて、眼前に広がる大河が無頓着に、急速に流れていくのをじっと眺め続けた。彼は日没の頃にこの河を眺めるのが好きだった。それはたぶん、沈みゆく太陽が、パンタイ河の水面に燃え立つような黄金の色合いを広げるからで、そしてオルメイヤーの頭は実際、しばしば黄金でいっぱいになるのだった。黄金——彼自身は獲得に失敗したが、他人は——もちろん不正な手段で——手にしたもの、あるいは彼が今なお、彼自身とニーナのために、偽りのない努力によって入手しようとしているもの。彼は長年にわたり住んできたこの沿

岸地方を離れた場所で、富と権力をほしいままにする夢に心を奪われていた。この土地での骨折りと争いの苦さも、その償いとしての、莫大で輝かしい報酬を想像することによって忘れ去ることができた。ヨーロッパに移り住むのだ、娘と一緒に。彼らは富裕で、尊敬されるだろう。娘の際立つた美しさと彼の莫大な富を前にしては、彼女の混血をあげつらう者などはいないだろう。彼女の勝利を目にして彼は若返り、まるで囚人のような思いで過ごしたこの岸辺での二十五年におよぶ、胸の張り裂けるような苦闘も忘れ去ってしまうだろう。これらすべてがいまや彼の手の届くところまで近づいていた。デインが戻りさえすれば！ そして彼は自らの関心事、彼自身の分け前のためにも、じきに戻ってくるだろう。それにしてももう一週間以上も遅れている！ たぶん彼は今夜にでも戻ってくるだろう。

オルメイヤーが新しい、しかし既に朽ち始めていた家——彼の生涯における究極の失敗——のペランダに立って、幅の広い河を眺めながら考えていたのは、このようなことだった。今夕は雨のせいで河は増水しており、黄金の色合いは見られなかった。漫然と眺める彼の眼下にあるものは、濁り水の荒れ狂う急流で、流

木、枯れた木の幹、そして枝や葉をそっくりつけたまま根こそぎにされた木が流れ、それらに挟まれた水は渦巻き、怒り狂ったような轟音をたてていた。

流されていた木の一本がオルメイヤーの家のちようどすぐそばの、ゆるい勾配の岸に打ち上げられたのを見て、彼は白昼夢から醒め、淡い関心をもつてその動きを追った。木は泡立ちしゅうしゅうと音を立てる水に囲まれてゆっくりと向きを変え、やがて障害物から解放されるとふたたび流れ下りはじめた。水中でゆっくりと回転して、葉がすっかりはがれ落ちた一本の枝を持ち上げたが、それはまるで、河の手荒で不当な暴力に抗議して、天に向かって無言の訴えかけをしているように見えた。この木の運命はどうなるのか、オルメイヤーの関心はにわかに高まった。やや下流の、水位の低い部分を乗り越えられるか、彼は身を乗り出して見た。木がどうにか乗り越えたのを見届けると、これであの木は妨げられることなく海に流れ込むだけだと思いながら身を引き、深まりゆく夕闇の中でだんだん小さく、ぼやけていくこの意志なき物の宿運をうらやんだ。木が視界から完全に消え去ると、海上どれほど遠方まであの木は漂流して行くのだろうかと思ひ巡らせた。北か南か、海流はあの木をどちらに運ぶのだ

ろうか？ 恐らく南だろう、セレベスの見えるほうを流れて行ったのだから、そしてたぶん、遠くマカッサルまで行くのだろう。

マカッサル！ 彼の空想はテンポを速めて架空の航海中の木を遥かかなたに押しやり、一方彼の記憶はおよそ二十年もさかのぼって、若く、やせぎすのオルメイヤーを思い浮かべた。白ずくめで質素な身なりをし、オランダの郵便船からマカッサルのほこりっぽい桟橋に上陸した彼は、老フリーデイクの倉庫を根城として、運勢を切り開こうとしたのだった。これは彼の人生における特筆すべき出来事で、新しい生活の始まりだった。ボイテンゾルクの植物園に勤める下級官吏であった父親は、むろん息子がこのような会社で職を得たことを喜んだ。若者自身はもとより、環境の良くないジャワの海岸と、両親の住む平屋住宅のささやかな安楽とを後にすることに異存のあるはずもなかった。ここでは父親は一日中、現地の庭師の愚かさに不平をこぼし、母親は長い安楽椅子に身を沈めて、彼女が育ったアムステルダム^{アムステルダム}の栄光と、その地のタバコ商人の娘という彼女自身の地位が共に過去のものになったことを嘆いていたのだった。

オルメイヤーは心も軽く、そして財布は更に軽く、

家を後にした。流暢な英語と、数学の知識を携え、世界を征服する準備が整って、その目的が達成できるところを少しも疑ったりはしなかった。

このようにして二十年が経過した今、ボルネオの夕刻のうつとうしく息のつまるような暑さの中で、彼は快さの混じった痛惜の思いとともに、そびえ立つフリーデイクの倉庫の、ひんやりとした内部の光景を思い起こしていた。そこではジンを収めたケースや梱包されたマンチェスター産の商品がまっすぐな長い街路のように並んでおり、巨大な扉が音もなく揺れていた。ほの暗い照明は、外の通りの照りつける日差しを浴びた身にはこの上なく心地よいものだった。商品の積み重なった間にある、柵で区切られた狭い空間で、こざっぱりとした服装、落ち着いた態度、物悲しげな目つきの中国人の事務員たちが、沈黙のうちにすばやくペンを走らせていたが、その周囲は、つぶやくように口ずさまれ最後は精一杯の叫びで終わる歌に合わせて樽を転がし、ケースを移動する作業員の集団がたてる騒音に満ち溢れていた。突き当たりの大きな扉に面したところには、同じく柵に囲われたもっと広い、十分な照明を備えた空間があった。そこは作業員たちの騒音からも遠く離れ、別の思慮深そうな中国人たちが数え、

積み重ねるオランダ・ギルダー貨の絶え間なくチャリンと鳴る音が優勢になっていた。ここの事務を管理していたのは出納係のヴィンク氏で、この場所に鎮座する守り神であり、オーナーの片腕だった。

このゆとりのある空間で、緑色の小さいドアの近くに机を置き、オルメイヤーは仕事をしていたが、このドアの傍らには赤い飾り帯とターバン^{ターバン}のマレー人がいつも立っていて、その片腕は上方から垂れ下がった細い紐を持ち、機械のような正確さで上下に動いていた。紐は緑色のドアの向う側にある吊りうちわを揺り動かすためのものだった。ここがいわゆる専用室の部分で、オーナーたる老フリーデイクがどつかと座り、騒々しく面会を行っていた。時折小さなドアがボタンと開け放たれると、そのつかの間、外部にいる者には青みを帯びたタバコの薄煙を通してなかの様子が見えた。様々の形をした瓶や背の高い水差しが載っている長いテーブル、饒舌な男たちが寝そべったような姿勢で占拠している藤の安楽椅子。そして時々オーナーがドアから首を突き出して、取っ手を片手に、ヴィンクを相手に内緒話でもするようにブツブツと語りかけた。時には倉庫中に響き渡る大声で命令を発し、あるいは躊躇している訪問客を見つけて親しげに大声をあげるのだっ

た。「よお来たな、ガビタン！どこから来た？パリか、え？魚は手に入れたか？魚が欲しいんだ！持ってきたものは全部貰うぞ、ハ、ハ、ハ！まあ入れ！」そして訪問客は引きずり込まれ、ドアが金切り声を上げて閉まり、あたりは再び普段の喧騒に包まれた——作業員の歌声、ペンの走り書きの音、そして何にも優つて、幅広の銀板に向かった実直な中国人の男たちが、指でチリンと奏でる音楽が絶え間なく鳴りわたっていた。

当時、マカッサルは活気あふれる通商の地であつた。オーストラリアの沿岸で帆船の装備を整え、富と冒険を求めてマレー諸島に進出する勇敢な連中は誰でも、この島ではマカッサルを利用した。果敢、向こう見ずであり、商才にたけ、当時まだ沿岸に広く出沒していた海賊との接触をもいとわず、すばしっこく利益を得る彼らは、交易と気晴らしの目的でこの湾に「ランデヴー」するのを常とした。オランダの商人たちはこのような男たちを「イギリスの行商人」と呼んでいた。中にはたしかに、このような生き方に魅惑された正真正銘の紳士もいたが、ほとんどは船乗りだつた。そんな彼ら全員に公認された第一人者がトム・リンガードで、この男については全てのマレー人が——正直者で

ら、囁んで含めるようなささやき声で付け加えるのだった。「承知のとおり、彼は河を発見したんだからね」

まさにそのことだつた！彼は河を発見したのだ！日中はフリーディクと取引を行い、夜はスندا・ホテルの幅広いベランダの下でシャンパンを飲み、ギャンブルをし、騒々しく歌い、混血の少女に言い寄る、ありきたりの海の冒険者の群れをはるかに凌駕する存在に老リンガードを高めていたのは、この事実だつたのだ。それへの入口を彼自身しか知らないこの河へ、リンガードは種々さまざまなマンチェスターの品物、たとえば真鍮のゴング、ライフル、火薬などを持ち込むのを常としていた。このような場合、仲間が深夜の大酒盛りで酔いつぶれ、テーブルの下で寝ているのを、アルコールの影響をまったく受けないリンガードが見届けてから、自ら所有し指揮するブリッグ船（訳注「横帆で二本マストの船」「フラッシュ号」）に乗り込み、夜の間に投錨地を静かに離れ去るのだった。多くの者が彼を追いかけて、ガッタバーチヤ（訳注「インドネシア産アカマツ科の木からとれる丈夫なゴム状樹脂で、歯科充填、電気絶縁などに用いる」、藤、真珠貝、鳥の巣、蠟、ガム・ダンマー（訳注「南洋諸島産フタバ

あれ不正直者であれ、もの静かな漁師であれすてばちの殺し屋であれ——「ラージャ・ラウト」、すなわち「海の王」として一目を置いていた。

オルメイヤーはマカッサルに到着して三日と経たずにリンガードの名を知り、彼の機敏な商取引、恋愛のうわさを聞き、またスルー（訳注「フィリピン・ミランダナオ島南西部の諸島」の海賊との生死をかけた闘争、さらには海賊のあやつるブラフ船（訳注「インドネシア地方の快走帆船」）との長い闘いのすえ、勝ち誇るリンガードが船内に乗り込み、乗組員を海中に追いつ落としたあとで船の中に子供——少女——を見つけたというロマンティックな物語をも知った。一般に知られているところでは、リンガードはこの少女を養子とし、ジャワのある修道院で教育を受けさせており、彼女を「私の娘」と呼んでいた。そして彼が帰国する前に彼女を白人と結婚させ、すべての財産を彼女に相続させる強い誓いを立てたという。「そうして、リンガード船長は、大金を持っているんだ」ヴィンク氏は首を一方にかしげ、もったいぶった口調でよく言つたものだった。「まさに大金さ。フリーディク以上にね」そしてこのような信じがたい断定を聞いた驚きから回復する余裕を聞き手に与えるため、少し間を置いてか

ガキ科の木からとれる硬質の樹脂で、ワニス、インキなどの原料」といった物資が豊富だというその地を見つけようとしたが、この小さいフラッシュ号はこの海域のどんな船よりも速く走れた。追いかけていった者のなかには、隠れた砂の堆積やサンゴ礁にぶつかるという災難にあつて、全財産を失い、この陽光に照らされて微笑む海の隠された魔手から、辛うじて命からがら逃れた者もいた。他の者も意気沮喪した。かくして長年の間、希望の地への入口を守る、緑に覆われ平穩に見える島々は、熱帯自然の冷酷さをこともなげに維持しつつ、その秘密を守り通したのだった。このようなわけで、リンガードは姿を現したり消したりしながら、秘密の、あるいは公然の航海を続けていたのだが、彼の投機の大胆さ、利益の莫大さから、オルメイヤーの目には次第に彼が英雄と映るようになった。とりわけ彼が倉庫内を悠々と歩いていき、ヴィンクに「元気かい？」と唸るように声をかけたり、小さな緑色のドアの向こう側で商談を始めるに先立って、オーナーであるフリーディクに大声で、「やあ、老いばれ海賊、まだ生きてるのか？」と挨拶したりするときは、まさしく大人物に見えた。夕暮れどきにオルメイヤーが書類を片付けて、ヴィンク（オルメイヤーは彼の家に寄宿し

ていた。と一緒に車で帰る支度をしているときなどに、人影のない倉庫の静けさの中で、専用室から激しい議論の物音がもれるのに気づいて耳をすますることがよくあった。オーナーの低く抑揚のない唸るような声と、それを遮るリンガードの怒鳴り声——さながら一本の骨を争う二頭のマスティフ犬だった。しかしオルメイヤーの耳には、それは二人の巨人の口論——神々の戦いのように聞こえた。

およそ一年ほど過ぎると、商売上オルメイヤーと頻繁に接触するようになっていたリンガードは、突然、はた目には不可解な好意を彼に対して示すようになった。深夜にスンダ・ホテルでの宴会の席で仲間たちとオルメイヤーを誉めそやし、そしてある晴れた朝、「あの若者」を貨物上乗人として欲しいと言い張って、ヴィンクをびつくりさせた。いわば船長付き事務員として、すべての事務を自分に代わって取って貰いたいというのだ。フリーディクは承諾した。オルメイヤーは若者特有の変化への渴望から、喜び勇んで、乏しい所持品を取りまとめ、老練の船乗りリンガードが群島に属するほとんどの島を訪れるのを常とした長い航海のひとつに際して、フラッシュ号に乗り込んだのだった。いつの間にか数カ月が過ぎ去って、リンガードの親

密さは増したように思われた。星がきらめく穏やかな空の下で、島々が放つ芳香をたっぷり含んだそよ風がブリッグ船を静かに推し進めているとき、しばしば甲板をオルメイヤーと共にゆっくり歩きながら、老船乗りは魅せられた聞き手に胸中を打ち明けるのだった。彼は自分の過去を、逃れてきた数々の危険を、取引で得た莫大な利益を、将来いつそう大きな利益をもたらす可能性のある新たな提携関係を語った。また、よく海賊のブラフ船で見つけた少女のことを話に出したが、奇妙にも、当然のように父親らしい愛情を抱いているそぶりを見せていた。「もう大きい女の子になっているに違いない」と彼は言ったものだ。「もうほとんど四年会わないことになるからな。くそ！　オルメイヤー、もしこの航海でスラバヤまで行けないのだったら」。このような言葉の後、彼はいつも「なんとかせにやらんな。——なんとかせんと」とつぶやきながら自分の船室に降りて行くのだった。一度ならず彼は力強く「エヘン！」と咳払いしながら、何事か言いだしそうな様子でオルメイヤーに急ぎ足で近づいて彼を驚かせ、いきなり向きを変えて黙ったまま甲板の波よけ壁に寄りかかり、数時間も身動きせず、船側の青光りする海のきらめきを眺めていることがあった。幾

度にもおおよそこのような内幕の意思伝達の試みがどうにか成功したのは、スラバヤに到着する前夜のことだった。咳払いをしてから彼は話しはじめた。ある意図をもって語ったのだった。オルメイヤーを自分の養女と結婚させたかったのだ。「自分が白人だからといってはねつけないでくれ！」彼は突然叫び、びっくりした若者が言葉をさし挟む余裕を与えずにまくし立てた。「俺を相手にそんなことはさせないぞ。お前の細君の肌色など誰が見るものか。言っておくがな、そんなことを気にするには札束は厚すぎるんだ。それによく聞けよ、俺が死ぬまで札束は増え続けるんだ。何百万ドルだ、カスパー。何百万ドルだぞ！　そいつはみんなあの子のためのもので——俺の言うとおりにすれば、お前のためのものになるんだ」

この予期せぬ提案に仰天したオルメイヤーは、ためらい、しばらくはものも言わなかった。活発な想像力の持ち主であった彼は、この短い時間に、あたかも目のくらむような閃光を浴びているような感覚の中で、うずたかく積まれたギルダー銀貨を見、富裕な生活がもたらす可能性の全てに思いを巡らせた。怠惰で安楽な生活——それは自分にいかにも適しているように思われた——彼が所有することになる船、倉庫、商品老

リンガードは永遠に生きるわけではない、そして他の全てに優って、遠い将来におとぎ話のお城のように輝いて見えるものは、彼の夢見る地上の楽園、アムステルダムの大邸宅であった。そこで、老リンガードの財産によって男の中の王となった彼は、形容しがたいまでの栄光に包まれて晩年を送ることになる。別の面、すなわち船一艘を満たしていた海賊どもの置き土産であるマレー人の少女が生涯の伴侶となることについては、彼自身が白人であることで、面目を失うような一種混乱した意識があった。それでも、修道院で四年も教育を受けたのだから！　それに、神の恵みによって彼女は早死にするかも知れない。運はいつも彼の味方をしてきたのだし、金の力は偉大だ！　当たって砕けろだ。拒否する理由がどこにある？　彼は漠然と、彼女を何処かに、いや何処でもよいから、彼の華やかな将来の生活から離れた場所に置くことを考えていた。マレー人の女に決着をつけることはたやすい。彼の東洋的な意識の中では、修道院の教育や儀式があるうとなかろうと、彼女は結局はしたために過ぎないのだから。

彼は顔をあげて、不安気で、しかも怒りを表している船乗りの顔にまっすぐ向かい合った。